

けるは、遊佐様の御子藏人様、紺屋権右衛門所に火たきし  
ておはします。何とぞ不便をなさせ給へと、うちくどき嘆  
きければ、如庵聞きて、藏人事は悪人の子ながら某が甥也。  
さあれば呼出し、小扶持もとらせたい共、領分は十左衛  
門に譲りぬれば、某心にも難任。とかく十左衛門に尋ねん  
とて、飛札にて談合有りければ、元連の返事に私爲めにい  
とこにて候へども、敵對の者の子なれば、先祖への忠に殺  
害可被遊。但し此上にも思召次第のよし申送る。如庵も年  
よられ、心もよわく成り給ふかと、元連涙を流しけり。如  
庵返書を見て又押込<sup>(返)</sup>し、其方申分尤なれども、悪人の子な  
れば助置き、なぶり殺にして因果をしらせんと思ふはいか  
にとあれば、いかやうともとの返事也。夫より、如庵彼男  
を何となく抱えつゝ、臺所に指置き、脇差も無用とて、小  
使役に云付けて、諸の用に資遣ひ、或時は折檻打擲し衰成  
事共也。此の藏人は元來うつけたる生付ゆゑ、おろかにて  
折檻にも打擲にも逢ひけるとなり。然るに元連三十一歳に  
て慶長十六年病死、内室は御城へ被爲入、利長卿の御意有  
つて如庵は金澤へ被引越、御仕置の事ども勤められける

處、彼遊佐藏人をば取立て、侍になし、知行百石とらせ、  
母には二百石遣し介抱あり。母子とも死去之後、藏人に男  
子あり。母子の知行合三百石とらせ、遊佐太夫と申しけり。  
次太夫死して其子傳内に百石遣し、此傳内子細有りて、宇  
野傳内と改めけり。とあり。混見摘寫に載せたる趣も同様  
なり。按ずるに、長谷部系圖に、對馬守續連が女子、畠山  
八臣遊佐美作續光の嫡男四郎左衛門義房妻。とあり。され  
ば、遊佐孫八郎忠清とあるは、四郎左衛門義房の事なるべ  
し。遊佐美作守續光は、連龍の父兄を殺害せし讐敵にて、  
遊佐一族は長氏の恨家也といふべし。

○中西摩兵衛傳話

漸得雜記に云ふ。長家の足輕頭中西摩兵衛咄に、親摩兵衛  
若き時、傍輩には、われが何としてかとしてなど、心安き  
まゝ下輩の言葉遣ひせしを、其父の曰く、傍輩其外友達に  
は成程常々慇懃に言葉遣ひする物也。戰場に於て我人仕合  
にて、人は高名して我は手に合はざる事も有るべし。其時  
はおのづから言葉遣ひ慇懃に云はねばならず。此時見苦敷  
也。兼ねて慇懃にするは爰也と。此人慶長五年大聖寺陣の

時、金ヶ丸城際にて討死也。今の中西權太夫の曾祖父也と。  
又咄隨筆に云ふ。中西摩兵衛安純は、初め豊太夫と云ひ、  
當九郎左衛門殿又三郎殿と申せし時、歩頭より足輕大將に  
成り、後は用人をも勤めけり。又三郎殿幼少の時、小袖上  
下・帷子其の外御手自ら被下候へば、難有と頂戴して、先  
づ納戸へ預けて我が屋へ取來る事なし。大隅守殿御代には  
式臺取次役せしが、泊番の翌朝あけ六つ時に門を開くに付  
き、以前に疾く起きて居る内、門外を辻へ出づる商人の多  
く通る音を聞きて、あの商人等は夜をこめて辻へ出で、背  
物等を認めて、其の日終日賣なしては、又明日も其の明日  
も毎日々々如此。我等たまに泊番の翌朝ばかり朝疾くより  
起きぬ。剩へ其日は非番とて休み、過分の祿を賜はり、妻  
子・下人等を相應に養ふ事、扱々奉公人と云ふ者は心安く  
樂成る物哉、主人は難有忝きものなりと、度々語りし。或  
時江戸表などの咄するとて、主人の噂は曾てせぬ事也。罰  
を蒙るべし。帝主・將軍の御事は遙に遠く、我等蛆蟲同前  
の者、飼當る事なしと云ひ畢つて咄し出でられぬ。元祿何  
年摩兵衛氣分以外悪しく、番引して居し。村井豊後守殿

柴倉に火災あり。夜中といひ病中なれども、装束して出で  
けるが、眩暈以の外にて行倒れ、僕の肩に懸り歸宿せり。  
不斷疎略を用ひて無益の費少しもなく、中西吉佑・同作平  
とて第二人なれ共、元より大母屋の事なれば、老母は摩兵  
衛方に不自由ならざるやうに隠居所を拵へ、衣服食物共に  
とぼしからざる様に、第二人と共に晝夜孝を盡しける。ま  
して病中死後迄の事、云ふに不及事なり。元祿九年は何と  
したる事やらん。金澤に米拂底にて、武家・町方ともに難儀  
に及ぶ。二人の舍弟は、勝手も宜しきゆゑ、飯米を知行所  
より官、腰へ積廻し、官、腰の町藏へ預け置きしが、官、腰町  
奉行澤園右衛門殿、町藏に封を付けられし故、取寄する事  
ならず。金銀を以て調へても寶物なし。米所持仕ながら及  
難儀時は、摩兵衛方より飯米を送る。夏飯米の事なれば、  
餘計も無之内より如斯也。かやうの節は、渴命におよび、  
死せば一所と存するなりと某に語りし。如此一家むつまじ  
く、遠縁者たる某湯浦へ湯治するに、一巡りの内には、二  
度も留守を尋ね、上湯すれば來りて、其方年寄りて毎年の  
湯治無心元など懇なる心入れ故、一家浪人などすれば、我